

基礎医学からみた パーキンソン病

入場無料
先着200名様

パーキンソン病は、手足が震える、動かしにくい、といった症状を示す1000人に1人程度の患者さんがいる頻度の高い神経難病です。脳の奥深くにある「大脳基底核」と呼ばれる場所の神経細胞の活動のバランスが崩れると発症します。根本的な治療法はまだ見つかりませんが、薬や電気刺激で神経活動のバランスを戻すことによって、その症状を軽減することができます。一方、この神経活動が逆の方向にバランスを崩すと、ジストニアという別の病気を引き起こしたりします。「大脳基底核」の神経活動の変調が様々な病気を引き起こすメカニズムや、その治療法について、基礎医学の立場からお話しします。



講演者

自然科学研究機構 生理学研究所
統合生理研究系 生体システム研究部門

南部 篤 教授

プロフィール

三重県員弁郡出身 京都大学医学部卒 医学博士。京都大学医学部助手、米国ニューヨーク大学医学部博士研究員、生理学研究所助教授、東京都神経科学総合研究所副参事研究員を経て、平成14年11月から現職。専攻：神経生理学

2013年
11月16日 土
午後1時30分～3時

場所



岡崎げんき館 3階講堂

〒444-8545 岡崎市若宮町2丁目1番地1

定員

200人【入場自由・当日先着順】

●当日、会場に直接おこしください。
定員を超えた場合は、入場をお断りすることがあります。

対象

高校生以上

パーキンソン病とはどんな病気？

パーキンソン病は、脳の基底核のうち黒質と呼ばれる部分にあるドーパミンを作る神経細胞が減ることによって、筋肉がこわばり手足が動かしづらくなる、手足が震えるなどの症状をきたす神経難病です。

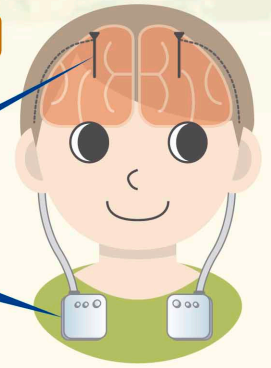
治療法としては、減ったドーパミンを薬によって補充するという方法がありますが、病気が進行して薬によるコントロールがうまくいかなかった場合は、基底核に刺激電極を入れて電気刺激を加えるDBS療法が行われます。

DBS療法（脳深部刺激療法）

脳深部刺激電極

脳の深部（視床、淡蒼球、視床下核）に電極を設置し、微弱な電気刺激を与えて機能改善を図る治療法です。

完全埋込型刺激装置



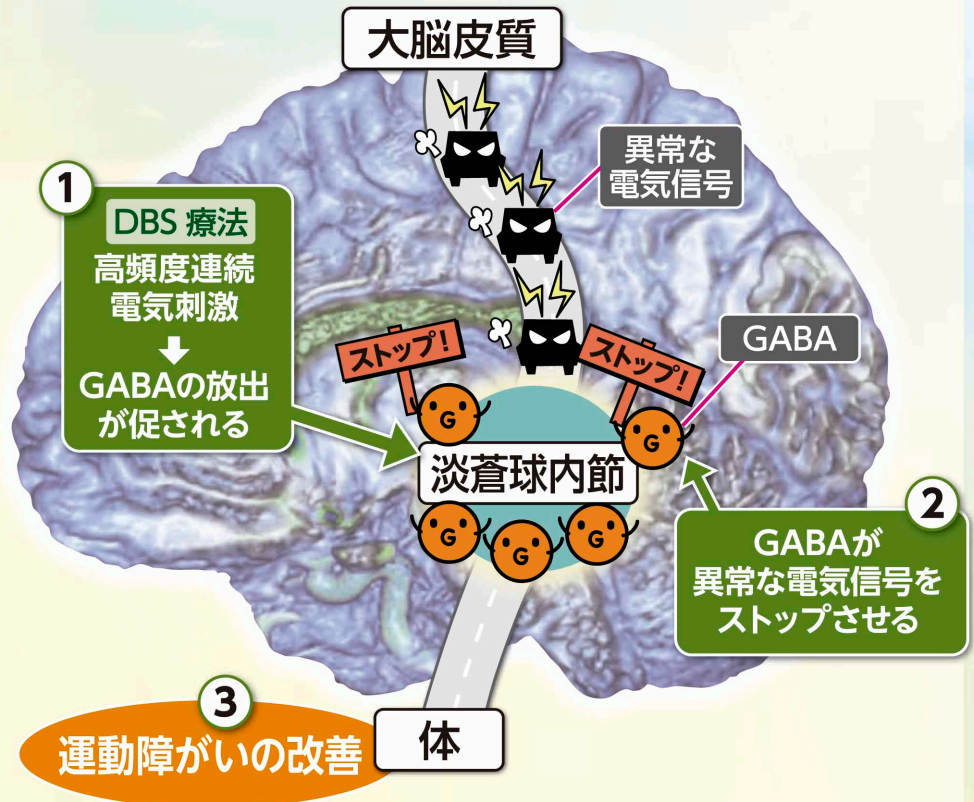
パーキンソン病にかかわる神経回路とDBS療法

■パーキンソン病の症状がおこる仕組み

大脳皮質は手や足を動かす脳からの運動情報の発信源です。基底核は、この運動情報を受け取り、運動を円滑に行うための調整を行っています。パーキンソン病の症状は、基底核の神経回路で異常な電気信号が発生し、体に伝えられてしまうためにおこると考えられています。

■DBS療法のメカニズム

DBS療法は、電気刺激によってGABAの放出を促し、基底核の出口にあたる淡蒼球内節の活動を止めることで、異常な電気信号が体に伝わらないようにしていると考えられます。



GABAってなに？

GABA (γ-アミノ酪酸: Gamma-AminoButyric Acid) は、大脳や小脳などに存在し、抑制性の神経伝達物質として興奮を鎮める役割があります。



会場のご案内



〒444-8545 岡崎市若宮町2丁目1番地1

- アクセス
- まちバスをご利用のかた
東西ルートの「まちバス」が30分間隔で運行します。
(中岡崎 — 市役所 — 岡崎げんき館)
※バス停は岡崎げんき館の敷地内にあります。
ぜひご利用ください。
 - 名鉄バスをご利用のかた
東岡崎駅北口バスターミナルより乗車し、「岡崎げんき館前」バス停下車。
 - 自動車をご利用のかた
駐車場(220台)の入口が敷地南側にあります。

